映画『怪物』【特別映画鑑賞教室】 午前の部（小学生）

是枝裕和監督・伴瀬萌プロデューサーが小学生たちの質問に回答

～映画制作の舞台裏から作品に込めた思いまで～

【イベント概要】

- 開催日：2026年11月11日（水）12:10〜13:00頃
- 会場：岡谷スカラ座（長野県岡谷市）
- 作品：『怪物』（2023年）
- 登壇者：是枝裕和監督、伴瀬萌プロデューサー、冨田和彦氏（録音／サプライズゲスト）
- イベント：諏訪圏フィルムコミッション20周年記念事業「特別映画鑑賞教室」

2026年11月11日、長野県岡谷市の岡谷スカラ座にて、映画『怪物』の上映と【特別映画鑑賞教室】（ティーチイン）が開催された。

午前の部には、是枝裕和監督と伴瀬萌プロデューサーが登壇。作品を鑑賞した小学生たちから寄せられた質問に丁寧に答えた。

また、イベントの途中には本作の録音を担当した冨田和彦さんもサプライズ登壇。撮影現場でのエピソードや音づくりの裏側について語る場面もあった。

◆「諏訪が大好きだから」──監督がこの街を訪れる理由

冒頭、司会者から「監督はどうしてこんなに諏訪に来てくれるんですか？」という質問が紹介されると、是枝監督は「諏訪が大好きだからです」と即答。映画『怪物』の撮影でお世話になったことをきっかけに、毎年のようにイベントなどで諏訪を訪れているという。

今年も春に行われた旧城北小学校のイベントに続き、今回が2度目の訪問。実家がなく、帰省する田舎がないという監督にとって、諏訪は定期的に帰ってくる場所のような存在になっているそうだ。

この日も会場に来る前には、撮影でお世話になった地元の方々に挨拶をしてきたという。「こうして映画を観ていただく機会をいただいて、子どもたちとお話ができるのを楽しみにやってきました」。そんな挨拶から、子どもたちとの質疑応答が始まった。

◆映画の撮影で楽しいのはどんなとき？

小学2年生の児童からは、映画の撮影中に楽しいと感じるのはどんなときか、という質問が寄せられた。

是枝監督は、学校の学芸会などでみんなと一緒に劇や発表をつくることを例に挙げ、「それを大人になってやっている感じ」と説明。東京を離れ、スタッフや出演者たちと長い時間を共にしながら、「こうした方が面白いんじゃないか」と意見を出し合い、一つの作品をつくり上げていくことが楽しいのだという。

伴瀬プロデューサーも、映画には画面に映る俳優だけでなく、その裏側に100人ほどのスタッフが関わっていることを紹介。エンドロールに並ぶたくさんの名前を見ながら、一人ひとりの顔を思い浮かべる時間がとても好きだと語った。

◆映画に登場する場所はどうやって決める？

続いて、映画の中にさまざまな場所が登場することに注目した女の子から、撮影場所の選び方について質問があった。

是枝監督によると、まず脚本に描かれている風景や建物にふさわしい場所を探すことから始まるという。そこで重要な役割を担うのが、地元で撮影を支援するスタッフたちだ。

会場ではロケ地探しに協力した今イベント主催・諏訪圏フィルムコミッション宮坂さんも紹介され、映画の舞台となった学校や廃電車のある場所などを、制作スタッフと一緒に探して提案したことが語られた。

一方、是枝監督自身も街を歩いて口ケ地を探すことがあるという。通常、口ケ地探しは車で移動することが多いため、車では入れない細い路地などが見落とされがちになる。

そこで監督は、あえてそうした場所を歩くようにしているそうだ。実際に今回の作品でも、監督が散歩中に見つけた場所が撮影に使われている。

また、劇中に登場する火災のシーンについても言及。実際に建物を燃やしたわけではなく、炎は後から映像に加えたものだが、消防車やはしご車は地元消防の協力によって撮影されたという。映画の一場面をつくるために、地域の多くの人々の協力が必要になることが紹介された。

◆映画に登場した学校や電車は今どうなっている？

作品を初めて鑑賞したという男の子とのやり取りでは、撮影に使われた学校についての話題も上がった。

映画の学校の場面は主に旧城北小学校で撮影されたが、職員室や保健室など、一部には別の学校も使用されているという。職員室を一からつくり込むには、机や本など大量の備品を運び込む必要があるため、実際の学校施設を利用したことが説明された。

また、物語の終盤に登場する廃電車についても紹介された。撮影当時は富士見町の廃線跡に車両が設置され、車内には椅子なども置かれていたが、現在は当時の場所に車両は残っていないという。

その一部は別の施設（諏訪湖間欠線センター内）に展示されていることも紹介され、映画の舞台となった場所の現在の姿を知る機会となった。

◆「普通」って何だろう？―依里の言葉に込められた意味

依里が自分の脳について「豚の脳」と言われていることに関する質問が寄せられた。

是枝監督は、男の子が女の子を好きになることもあれば、男の子を好きになることもあり、誰かを好きになる感情を持たない人もいると説明。人を好きになる気持ちにはさまざまな形があるにもかかわらず、「男の子は女の子を好きになるもの」「女の子は男の子を好きになるもの」と思い込んでいる人もいる。その思い込みによって、自分と違う人を「変だ」「おかしい」と捉えてしまうことがあるという。

依里もまた、周囲から普通ではないと思われ、父親から「豚の脳が入っている」と言われたことで、自分はほかの人と違うのではないかと思い込まされている。しかし、決してそんなことはない。

是枝監督は、一般的に「普通」とされていることが必ずしも正しいわけではなく、主人公の2人がそのことに気づき、今の自分のままでいいのだと思えるようになるまでの物語として、この映画をつくったと語った。

伴瀬プロデューサーも、物語の終盤で依里が「僕も普通になったんだよ」と話した際、湊が「もともと普通だよ」と返す場面に触れた。制作に携わった人たちも、湊と同じ思いを持ちながら作品をつくっていたという。子どもからの一つの質問をきっかけに、映画が描こうとした大切なテーマが語られる時間となった。

◆物語はいつ、どんなときに思いつく？

小学4年生の児童からは、物語を思いつく瞬間について質問が寄せられた。

是枝監督は、電車に乗っているときに物語を思いつくことが多く、電車に乗ることが好きだと回答。この日も特急あずさに乗って会場まで来たものの、残念ながら新しい物語は思いつかなかったそうだ。

さらに、映画『怪物』の脚本を担当した坂元裕二さんが、この物語を考えるきっかけになった出来事も紹介された。坂元さんが車を運転していた際、信号が青になっても前のトラックが動かず、思わずクラクションを鳴らしたことがあったという。

しかし、その直後、トラックの前から車椅子に乗った高齢の女性が現れた。トラックはその女性が通り過ぎるのを待っていたのだった。

自分に見えている世界は、決してすべてではない。少し視点を変えれば、まったく違う景色が見えてくる。その気づきが『怪物』という物語を考えるきっかけになったという。

是枝監督は、日常の何気ない出来事や小さな違和感を心に留め、それを種として育てていくことで物語が生まれるのだと説明した。

◆劇中に登場する「うなり笛」は本当にある？

ある児童からは、劇中に登場する不思議な音の鳴るおもちゃについて質問があった。

監督によると、これは「うなり笛」と呼ばれる実在のおもちゃで、手作りすることもできるという。作り方を調べて自分でつくってみると、きれいな音が鳴るものもあれば、うまく音が出ないものもあるそうだ。「ぜひつくってみてください」と、子どもたちに呼びかけた。

◆なぜ映画のタイトルは『怪物』なのか？

続いて、映画のタイトルについての質問が寄せられた。

是枝監督によると、脚本家の坂元裕二さんが最初につけていたタイトルは『怪物』ではなく、数字やアルファベットを組み合わせたような不思議なものだったという。

脚本づくりを進める中で話題になったのが、「モンスターペアレンツ」という言葉だった。映画の中で、湊の母親は息子を守りたいという思いから学校に強く抗議する。母親自身には正義があるものの、学校側から見ると、その姿が怪物のように映ることもある。

一方、別の立場から見れば、また違う人物が怪物に見える。本当は怪物などいないのに、人はそれぞれの立場から怪物を探してしまう。さらに湊や依里も、自分自身の中に怪物がいるのではないかと思い込んでしまう。

そうした物語の構造を踏まえ、「怪物」というタイトルは誰にでも当てはまり、同時に誰のことでもないという意味を持つものとして、最終的に選ばれたという。

◆一番好きなシーンはどこ？

小学4年生の児童からは、映画の中で最も好きなシーンについて質問が寄せられた。

伴瀬プロデューサーが挙げたのは、湊と依里がマンホールに耳を当てる場面。この日、会場に向かう特急あずさの車内で久しぶりに作品を見返したそうで、物語が2人だけの世界へと移っていく、印象深い場面だと語った。このマンホールのある川沿いも、是枝監督自身が見つけた口ケ地だという。

ここで、映画の録音を担当した冨田和彦さんがサプライズで登壇。冨田さんは、冒頭のうなり笛の音から消防車の音、火災の場面へとつながる一連の音づくりに特にこだわったと話した。

また、校長室でのやり取りの後、卓球をしている子どもたちの間を通り抜けていく場面もお気に入りだという。旧城北小学校の吹き抜けを生かした、学校らしい雰囲気が印象に残っているそうだ。

是枝監督は、校長先生と湊が音楽室で楽器を吹く場面や、立石公園の滑り台に2人が登る場面などを挙げた。特に立石公園のシーンは、もともと脚本にはなかったという。

撮影の合間に、スチールカメラマンの末永さんが子役の2人を連れて公園で写真を撮影。その写真を見た監督が気に入り、急きょ撮影することになったそうだ。

また、終盤の嵐の中で母親と先生が横倒しになった車両を探す場面も、監督のお気に入りの一つ。雨の中、車両の窓にたまった土を手でかき分ける様子を下から捉えたカットが印象に残っているという。当初から狙っていたわけではなく、撮影の中で生まれた場面が強く記憶に残っていることも明かされた。

◆なぜ物語は3つの視点で描かれている？

小学6年生の児童からは、物語の途中で視点が変わる構成について、ほかの案もあったのかという質問が寄せられた。

是枝監督によると、この構成は脚本になる前のあらすじの段階から決まっていたという。最初は母親の視点、次に学校の先生の視点、そして最後に子どもたちの視点。同じ出来事を異なる立場から描く三部構成は、企画の初期から一貫していたことが明かされた。

◆上諏訪駅での撮影はどうやって行われた？

小学3年生の児童からは、上諏訪駅付近の階段に大勢の人が集まるシーンについて、通行を規制して撮影したのかという質問があった。

伴瀬プロデューサーによると、この場面は撮影初日に撮られたものだという。劇中では複数の視点から登場するため、撮影するカットも多かった。さらに、野次馬が集まる場面や消防車が通過する場面など、さまざまな要素を組み合わせる必要があった。

夜間撮影であることに加え、子役の撮影時間には制限があり、消防車を走らせられる時間にも条件があったため、初日から非常に緊張感のある撮影だったという。画面の奥に映っている大勢の人々も、地元の方々が協力したエキストラであり、撮影に関係のない通行人が偶然映り込んだわけではないことが説明された。

◆ラストシーンの2人は生まれ変わったのか？

映画の結末についても、鋭い質問が寄せられた。最後に湊と依里が走っていく場面は、2人が生まれ変わったことを表しているのか。それとも、現実の世界で生きているのか。

是枝監督は、制作側としては2人が生まれ変わったとは考えていないと説明した。2人は2人のまま、自分自身を肯定して生きていく。そのような思いでラストシーンを描いたという。

また、最後の場面で線路沿いの柵がなくなっていることについても言及。物語上は台風によって柵がなくなったという設定だが、象徴的には、2人が進んでいく道を遮るものはもうない、という意味が込められているそうだ。

実際の撮影では、安全上の理由から柵を外す許可を得ることは容易ではなかったものの、地元の関係者や建設会社の協力によって実現したという。映画の結末に込められた思いと、その映像を実現するための舞台裏が語られた。

◆次はどんな映画をつくりたい？

最後の質問は、小学5年生の児童から。「次はどんな映画を撮ろうと思っていますか？」

伴瀬プロデューサーは、『怪物』で監督助手を務めた寺田ともかさんが監督デビューし、作品の撮影を終えて編集作業に入っていることを紹介。現在はその作品に携わっているという。

一方、是枝監督は、次回作としてイギリスで海外のスタッフやキャストと映画を撮影する予定があることを明かした。その後は再び日本に戻って作品を撮りたいと話し、まだまだ撮りたいものがたくさんあると意欲を見せた。

◆映画をもっと身近に感じてもらえたら

イベントの最後に、是枝監督は子どもたちに向けてメッセージを送った。普段ならなかなか観る機会のない映画だったかもしれないが、自分たちが暮らしている街で撮影された作品だからこそ、少し身近に感じてもらえたのではないか。

映画をつくることに興味を持ったり、もっと映画を観てみたいと思ったり、今度諏訪で撮影があったときには工キストラとして参加してみたいと思ったり。そんなきっかけになれば嬉しいと語った。

映画のつくり方を知りたいという素朴な疑問から、「普通」とは何か、ラストシーンにはどんな意味があるのかという作品の核心に迫る問いまで。子どもたちの質問

は実に多彩で、是枝監督や伴瀬プロデューサー、冨田さんの回答からは、映画づくりに携わる人々の思いや、諏訪という街への深い愛着が伝わってきた。

印象的だったのは、是枝監督が子どもたちからの質問にも、大人を対象とした普段のティーチインと変わらない真摯な姿勢で向き合っていたことだ。時には答えを探すように考え込み、ひとつひとつの質問に対して丁寧に言葉にしていく。

いつもより少しゆっくりと、子どもたちにも伝わりやすい言葉を選びながら語りかける姿からは、質問した相手の年齢にかかわらず、その問いを大切に受け止める監督の姿勢が感じられた。

映画を観るだけでは知ることのできない制作の舞台裏に触れ、作品への理解をさらに深める貴重な時間となったのではないだろうか。